

集まれ！ジオガイド

田畑朝恵*

Activities and constitution of the Association of Izu Peninsula Geo-guides

Asae Tabata*

はじめに

伊豆半島ジオパーク推進協議会では、2011年よりジオガイド養成講座を開催しており、2014年9月末現在で、3期生までが受講し、そのうち認定試験合格者117人が「認定ジオガイド」として活躍している。

この認定ジオガイドの大半が加入する「伊豆半島ジオガイド協会」が2012年8月に発足し、伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局と一丸となってジオパーク活動を推進している。

筆者は伊東市に事務局を置く「NPO法人まちこん伊東」（以下「まちこん伊東」と略）の一員として、2011年ジオガイド養成講座の開講時に委託事業としてその企画運営に携わり、現在は伊豆半島ジオガイド協会の会長を務めている。

2014年10月5日に豊橋市自然史博物館で開催されたシンポジウム「東三河のジオパークへ向けて」において「集まれ！ジオガイド」というタイトルで、伊豆半島ジオパークにおける活動実績を基に、伊豆半島ジオガイド協会発足の経緯やジオガイドの役割などについて講演した。ジオパークにおけるジオガイドの活動は多岐にわたり、その役割は大きい。本稿は、その講演内容をまとめたものである。

ジオガイド協会発足の経緯

伊東市では2000年に伊豆半島東方沖群発地震が発生し、その影響で観光客が激減し、主要産業である観光が大きな打撃を受けた。そのさなか「まちこん伊東」が企画する「まちづくり講座」で、「火山の恵みを生かしたまちづくり」という演題で、現静岡大学教育学部の小山真人教授を講師として講演会を開催した。

開催にあたって、地元の観光業者は更なるイメージの悪化につながるとして講演会の開催に難色を示したが、参加者からは「火山への理解が深まった」、「火山の恵みに気づかされた」などの前向きな意見が多く寄せられた。

またこの講演に触発され、「まちこん伊東」に入会した中学校の理科教諭らを中心に、会員や一般市民を対象として伊東市内の地形や地質を学ぶ、今日でいう「ジオツアー」が開催されるようになった。

2005年には愛知県から教育旅行に来る中学生を対象に、地元のペンション組合から「まちこん伊東」に対し、伊東市の国の天然記念物である大室山や城ヶ崎海岸（第1図）のジオガイドを要請された。学ぶ立場から案内役へと立場が変わり、ジオガイドとしての活動が始まった。ガイドと平行して、雨天対策としてのバーチャルジオツアーや火山教室の開発、防災教育の要素を盛り込んだテキスト作成など、試行錯誤を繰り返しつつその実績を積んでいった。近年は利用校の参加人数は2～3倍に増加している。この「まちこん伊東」

*伊豆半島ジオガイド協会 . The Association of Izu Peninsula Geo-guides. 590-2 Futo, Ito-City, Shizuoka 413-0231, Japan.

原稿受付 2015年2月6日. Manuscript received Feb. 6, 2015.

原稿受理 2015年2月13日. Manuscript accepted Feb. 13, 2015.

キーワード: 伊豆半島, ジオパーク, ジオガイド, ジオツアー.

Key words : Izu Peninsula, geopark, geoguide, geotour.



第1図. ジオサイト「城ヶ崎海岸」.

での活動が、ジオガイドとしての筆者のベースとなっている。

2009年、静岡県知事により「伊豆半島ジオパーク構想」が県議会で取り上げられ、静岡県庁と伊東市に「伊豆半島ジオパーク構想検討会議」が発足した。2010年には、伊豆半島6市6町首長会議が開催されジオパーク構想の推進に合意が得られた。この流れを受け、同年「まちこん伊東」では伊豆半島の地形、地質だけでなく、歴史、文化、生態系といった様々な分野を網羅した「まちづくり連続講座 伊豆を学ぶ—ジオパーク伊豆をめざして—」を開始し、伊豆半島ジオパーク構想の推進を後押しした。

2011年、伊豆半島ジオパーク推進協議会が発足すると、協議会から「まちこん伊東」に対し、まちづくり連続講座のノウハウを生かした「ジオガイド養成講座」の企画運営を委託された。最初の受講生は、地域のリーダーとして活躍が期待される人材として各市町から推薦を受けた51名で、筆者自身もこの一員として、講座の企画運営に携わる傍ら、専門家から地質の基礎や歴史文化を学び、仲間同士で地域の文化を学び合った。2012年には初のジオガイド認定試験が行われ、36名が合格した。

認定ジオガイドは各市町での活躍が期待されたが、認定後はジオガイドとして活躍するためのサポートがなく、広い伊豆半島内でジオガイドの活動が孤立化することも懸念された。そこで認定ジオガイド同士の横のつながりを確保し、資質向上の場とするねらいで、認定ジオガイドの大半が加入する「伊豆半島ジオガイド協会」が2012年8月25日に発足した。ガイド協会の設立は、伊豆半島におけるジオパーク活動を継続、推進していく姿勢を明確にするものとして評価され、同年9月、伊豆半島ジオパークは日本ジオパークネットワークへの加盟認定を果たした。現在は世界ジオパークネットワークへの加盟認定に向け、伊豆半島ジ

オパーク推進協議会事務局と一丸となってジオパーク活動を推進している（第2図）。

ジオガイド協会の活動と役割

ジオガイドとして最も大切なことは、ジオパークを訪れる人々に対し、大地の成り立ちやそこで育まれた歴史・文化などを、自分なりの言葉でどう伝えるかを日々研鑽することである。また、ジオパークにおけるジオガイドの役割として、ガイドだけでなく、ジオサイトの保全・保護活動や、地域の活性化につながる活動に積極的に関わることが求められている。

これらジオガイドに求められる役割を受け、伊豆半島ジオガイド協会では、ジオガイド養成講座の運営やスキルアップを目的とした講座や研修、教育プログラムの開発といった認定ジオガイド向けの事業だけでなく、ジオサイトの保全・保護活動、ジオツアーや「ジオフード」の開発、教育プログラム・防災教育といった活動にも取り組んでいる。

(1) 認定ジオガイドの養成とスキルアップ事業

ジオガイド養成講座の運営は、2期生から伊豆半島ジオパーク推進協議会より伊豆半島ジオガイド協会事務局へ委託されている。

日本のジオパークのジオガイドは、既にネイチャーガイドや山岳ガイドをしているガイド経験者に対し、「ジオ」の要素を追加で学習させ、改めてジオガイドと称することが多い。しかし伊豆半島ジオパークの場合は、最初からジオガイドを養成する講座が企画された。そのため、伊豆半島ジオパークで「認定ジオガイド」になるには、ジオ検定という試験に合格し、ジオガイド養成講座にガイド希望者として応募し、講座受講後、



第2図. 世界ジオパーク国内推薦審査でのジオガイドの様子.

ジオガイドの適性を判断する実技形式の認定試験に合格する必要がある。

認定ジオガイドのためのジオガイド養成講座は、ジオパークの理念を始め、様々な分野について学ぶ90分単位の座学（第3図）と6日間の野外実習からなる。ジオガイドの養成は、生涯学習目的の受講者を峻別するため、段階的に応募方式、認定試験方式を採用している。

試験に合格した認定ジオガイドへのフォローアップ、スキルアップもジオガイド協会の重要な事業である。ジオガイド養成講座の野外実習は12か所あるが、伊豆半島は広いので、講座では最大6か所までしか受講できない。ジオガイド協会では、各エリア長や協会事務局が連携し、野外実習の場を改めて設けることで、伊豆半島全体を案内できるジオガイドを養成している。

また、雨天対策の教育プログラム「キッチン火山実験」では、考案者である秋田大学の林 信太郎教授を招き、実験時の子どもの反応や子ども達への指導方法を含めた、認定ジオガイド向けのスキルアップ講座を開催している。この火山実験は、雨天時だけでなく地元企業との連携事業「夏休み子ども火山教室」としても開催し、好評を得ている。

認定ジオガイドに対しては、このほか資質向上を目指す講演会や、救命救急の担当者による応急手当の研修など、ジオガイド養成講座で不足していた部分についてフォローしている。

(2) ジオガイドの保全・保護活動

ジオサイトの保全・保護活動に関しては、伊豆半島ジオガイド協会の会員だけでなく、地域の他団体との協働や教育機関と連携して行っている。また自治体関係者への啓蒙等についても、伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局と連携して行っている。

道路拡張工事などで地球科学的に重要な地層が露出したような場合、その露頭がジオパークのジオサイトとして保全・保護の対象となりうるという認識を共有してもらうためには、事前にジオサイトに関する理解を深めてもらうことが大変重要である。また、露頭の剥ぎ取り標本を残したり、現地の露頭を一部保存して見学できるような方策をとってもらえるよう働きかけができる体制を構築したりすることが大切である。

(3) 地域の活性化のための支援活動

ジオガイドとして、既存のジオサイトをガイドする



第3図. ジオガイド養成講座「ツアー企画」の様子。

機会を待つだけでなく、新たなジオツアーの企画を考え、地元の旅行会社などに持ち込み、ガイドとしてバスに乗り込むなど、企業と連携した事業も行っている。また、ジオガシ旅行団の「ジオガシ」といった「ジオフード」の開発や提言等を行うなど、地域の活性化にも貢献している。

ただ、採算性や法律の枠があり、企画倒れでなかなか実現しない例もあり、専門家や関連企業と協力しながら実現できる事業の開発が必要である。

南伊豆の海岸には、溶岩が冷え固まってできた岩脈が、蛇が崖をはい上っているように見える「蛇のぼり」と呼ばれるジオサイトがある。そこへ行く観光船の航路が利用客の減少で廃止となり、見学できなくなったため、地元の漁船の協力を得てジオガイドが同乗し、単発の見学ツアーを開催した。参加者には好評だったが、定期的な渡船許可を得る手立てがないため、再開の目途は立っていない。

(4) 教育プログラム・防災教育

ユネスコが支援するプログラムであるジオパークの活動の中で、子どもたちへの教育プログラムや防災教育は欠かせない重要なものである。また、地元住民や教育機関に向けた教育プログラムや防災教育を拡充することで、その地域のジオサイトの保全・保護活動にも寄与することができる。

伊豆半島ジオガイド協会では、教育プログラムとして、伊豆半島内の子ども向けにジオパーク活動に関する出前授業や講座、現地のガイドも行っている。筆者の住む校区の小学校では、ジオパークを6年生の総合学習で取り上げ、ジオパークの話や近隣ジオサイトの見学、火山実験の指導を行っている。子どもたちは、

ジオに関係するお菓子を考案したり「こどもジオガイド」をめざし、楽しみながら学習している。

集まれ！ジオガイド

伊豆半島ジオパークの認定ジオガイドは、外部から高く評価されている。その高評価の一因には、伊豆半島ジオガイド協会の活動と役割が大きく関わっていると自負している。ジオガイド養成講座や認定試験を受けて認定ジオガイドとなっても、ガイドとしての力量をすぐに備えられるわけではない。ガイド間の交流やスキルアップのフォローをしつつ、集まったジオガイドをまとめて、引っ張りあげ、更なる大きな力に変えて、ジオパーク活動の人的な集積地となっていくことが、伊豆半島ジオガイド協会の重要な任務である。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、伊豆半島ジオパークのジオガイド活動について紹介する機会を与えてくださった豊橋市自然史博物館の皆様へ感謝申し上げます。また、静岡大学教育学部の小山真人教授には、地質や火山をはじめ、ジオパークに関する様々な知識を教えていただいた。また、伊豆半島ジオガイド協会や伊豆半島ジオパーク推進協議会、NPO法人「まちこん伊東」をはじめ、伊豆半島各地でジオパーク活動の推進に日々携わっている地域の企業や住民の方々といった多くの関係者の皆様へこの場を借りてお礼申し上げます。